

Study of the Concept of “人文学”: Focusing on the Appearance of the Word “人文学” in Japanese Dictionaries

TAKAHASHI Shin'ichi

The purpose of this paper is to investigate and examine the appearance of the word “人文学” in Japanese dictionaries from the Meiji period to the present lexicographically in order to explore the concept of “人文学”, which is assumed to be linked to the concept of “liberty”.

In Chapter 1, while surveying the present state of the appearance of the word “人文学” in currently circulating Japanese dictionaries, I confirmed the current situation in which there is no headword nor subheadword for “人文学” in Japanese dictionaries, and highlighted the situation in which the word “人文学” is easily equated with the term “人文科学”. I also pointed out that behind this situation lies a tendency to catch the word “人文学” as a relative concept or a genus, rather than an absolute concept.

In Chapter 2, as a result of examining 41 Japanese dictionaries from the Meiji period to the present, it was confirmed that no entry for the word “人文学” exists. After that, I continued my research focusing on the word “人文”, which is the base of the word “人文学”, and found that the word “人文” is not only deeply related to philosophical terms such as “人文主義” and “人道主義”, but also the Chinese word “人道”.

What I can conclude from this investigation is that in the process of philosophical examination and translation of a series of concepts derived from the Latin word *humanus* (in English, humanity, humanities, humanism, etc.) the word “人文学” was generated under some influence of two Chinese words “人文” and “人道”, as a two-character word base.

「人文学」の概念の考察

—国語辞典における「人文学」という語の現れを中心に—

高橋 伸 一 TAKAHASHI Shin'ichi

はじめに

昨今、学問の専門化、知の細分化への反省から、「知の横断化」といったフレーズで「人文学」への見直しが始まっている。本稿の目的は、人文学の概念の考究に向けて、明治期以降の国語辞典における「人文学」という語の現れを語誌的に調査し、その結果を踏まえ語基（造語要素）としての漢語「人文」の重要性を浮き彫りにすることである。

1. 「人文学」という言葉の所在：現代の国語辞典におけるその不在性と浮遊性

人文学とは何であるのか、という一つの素朴な問いから探求を始めると、すぐに躓くことがある。それは人文学という言葉がとても曖昧であるという点である。具体的に言えば、人文学という言葉の意味は簡単には捕らえることが出来ない、故に、その概念を基礎から組み立てることが容易ではない、ということである。その理由の一つとして、「人文学」という言葉が明治期から令和に至るまで、国語辞典内で全くと言っていい程、親見出し語（親項目）としても子見出し語（追込項目）としても立項されてこなかったという歴史的な事実が挙げられる。

例えば、現在流通している小型の国語辞典の最新版で「じんぶんがく【人文学】」を調べてみても、旺文社国語辞典（第11版）、岩波国語辞典（第8版）、新明解国語辞典（第8版）、明鏡国語辞典（第3版）、三省堂国語辞典（第8版）には、親見出しとしても子見出しとしても立項されていない。最大規模の日本国語大辞典（第2版）や中型の広辞苑（第7版）、大辞泉（第2版）、大辞林（第4版）でも状況は同じで、「人文学」という項目は立てられていない。

「人文学」という語が国語辞典で立項されていな

い理由は、この言葉が「大学」という限定された領域特有の専門用語¹であるからだ、ということだけで説明できるとは思えない。というのも日本の大学における「人文学」部や「人文学」研究科といった教育研究組織の設立と展開の歴史を考えれば、「人文学」という言葉は、確かに一般的とまでは言えないが、当該組織に所属する関係者、大学受験生・受験業界関係者には、広く知れ渡っているからである。また、現在、社会に流通している「人文学」を含むタイトルを持つ書籍や論文の数を踏まえれば、学術的検証を経ていない言葉だから、という理由も当てはまらない。加えて、ネットでの「人文学」というword検索の状況や、「人文学」と何らかの関係があると想定できる言葉（例えば、「人文科学」、「人文主義」、「人文科」）が国語辞典内で頻繁に立項されてきた事実を考慮に入れば、どうしてこれらの語が立項されているのに「人文学」は立項されないのか、という疑問は当然生じる。

国語辞典内で「人文学」という語が立項されない傾向は、見方を変えると、国語辞典における「人文学」の語自体の「現れ」の少なさや不在に通じていくと思われる。というものの、「一つの辞書」の文脈において未立項の言葉を他の見出し語の語釈の中で定義項として用いる場合、前提として概知の言葉である必要があるからである。当然ながら、「人文学」という語は、そうした既知の言葉ではない。このように考えると、「人文学」という語は、単一語として——「〇〇人文学」といった複合語などは除き——国語辞典の中には全く存在していないのではないかと、という予測も立てられる。

ところで、現在流通している国語辞典において、「人文学」の語としての現れという点で、広辞苑（第7版、2018）だけは例外的であると言える。第7版

においても「人文学」という語は未立項だが、他の見出し語の語釈の中に「人文学」という言葉が単一語として登場しているからである。具体的には、親見出し「人文」に追項された「人文科学」の語釈の中に、「人文学」という語が次のようにひっそりと登場している。

じん-ぶん【人文】〔易经賁卦「人文を觀て、以て天下を化成す」〕①人の世に行われる筋道。人倫の秩序。②人類の文化。じんもん。③人文科学の略。――か【人文科】(humanities) 人間の文化に関する教科の総称。〔中略〕→実科。――かがく【人文科学】(humanities) : 自然科学・社会科学に対して、哲学・歴史学・文学など人間文化を研究対象とする学問の総称。人文学。文化科学。――しゅぎ【人文主義】(humanisme フランス・Humanismus ドイツ・humanism イギリス) 〔中略〕。――ちりがく【人文地理学】地理学の一分野。〔後略〕
〔広辞苑(第7版)、二重下線稿者〕

上の語釈の表記を見る限り、「人文学」は続く語の「文化科学」と同様に、「人文科学」と同義の関係にあることが分かる。

ここで同義性という観点から「人文科学」の語釈を考えてみると、「人文科学」と同義の関係にある「文化科学」という語は、「文化」に従属する子見出し語として広辞苑(第7版)の中で立項されている。それゆえに辞書内の文脈では、「人文科学」と「文化科学」の同義関係は成立している。一方、「人文学」については、先に述べたように未立項である。また、親見出しの「人文」の語釈の中に「③人文科学の略」という語釈が存在しているので、「人文」と「人文科学」の同義の関係も形式的には成立している。しかしそれでも「人文」と「人文学」の同義関係を裏付ける記述が存在しない限り、「人文科学」と「人文学」との間の意味上の同義性は成立しない。つまり、広辞苑(第7版)では、「人文学」の語が登場してはいても、辞書の文脈から明らかになるのはあたかも浮遊しているような語としてであり、依然、「人文学とは何なのか」という問いは宙吊りのままなのである。

ところで広辞苑における「人文科学」の語釈における、「人文学」の単一語としての登場は、第7版(2018)だけではなく実は第6版(2008)から始まっている。第6版の「人文科学」の語釈は、第7版のそれと全く同一のものである。それより前の版には「人

文学」という言葉の登場はない。では、どうして「人文学」という言葉が、第6版以降になって「人文科学」の語釈の中に現れ始めたのであろうか。この点に関しては、「人文学」の語の現れがなく、第7版・第6版と近接する第5版(1998)を比較検討することが有効であるだろう。

【人文科学】(human sciences) : 政治・経済・社会・歴史・文芸など、広く文化系の学問の総称。狭義には、自然科学・社会科学に対して、哲学・言語・文芸・歴史などに関する学問の称。文化科学。〔広辞苑(第5版)、下線稿者〕

第5版と第7版・第6版の「人文科学」の語釈における差異で特に注目したいのは、見出し語の「人文科学」に付された英語部である。具体的に言えば、先ほどの第7版・第6版では「【人文科学】(humanities)」になっているのに対し、上の第5版では「【人文科学】(human sciences)」になっている²。ここで先に広辞苑内の見出し語に付された英語などの外国語の位置づけについて簡単に確認しておく、例えば、上の引用のような語釈の冒頭表記「【人文科学】(human sciences)」は、外国の学術語である human sciences の訳語が「人文科学」である、ということを示している³。

さて、ここで一旦立ち止まって、第5版、第6版、第7版と合わせたコンテキストの中で、第5版の human sciences の訳語が「人文科学」であることと、第7版・第6版の humanities の訳語が「人文科学」であることがどういう意味をもつのか、について考えてみたい。ここで明らかなのは、前者の「人文科学」と後者の「人文学」が完全に一致する語である以上、human sciences と humanities との間に同義性が生じるということである。しかし、ここで生じる同義性は、human sciences、humanities のそれぞれの英語概念の検討の結果生じた同義性ではなく、その翻訳行為あるいは訳語を通じて形式的に生じる同義性である。この形式的な同義関係に、humanities の訳語の一つとしてかねてより形式的に定着していた「人文学」が引きずられれば、「人文学」が「人文科学」と同義の関係を結ぶこともあり得るだろう。そして、もしこれが広辞苑の第6版・第7版において「人文学」の語が登場した理由であるとすれば、これはあくまでも稿者の想像でしかないが第7版よりあとの版で、「人文学」が「人文」の親見出しに追項された上で、「人文科学の別称」といった語釈が

付く日もさほど遠くないように思われる。

ただ、広辞苑の第6版・第7版における「人文科学」の語釈について違和感を持ったのは稿者だけではないのではないか。例えば、安酸敏眞は、論文「現在、あらためて《人文学》を問う」⁴の中で、広辞苑第6版の「人文科学」の語釈に触れながら次のような指摘をしている。

〔前略〕、近年「人文学」を再検証する動きはかなり顕著である。しかし、筆者の印象では、「人文学」と「人文科学」は一般にあまり区別されていない。実際、『広辞苑』第6版の説明では、「人文科学」に humanities という英語が充てられており、「人文科学」と「人文学」が同義であると見なされている。しかしはたしてそうであろうか。筆者自身は、両者は密接な関係にあるものの、やはり区別されるべきだと考える。一言でいえば、「人文学」は本来的には learning であり、「人文科学」は文字通り science である。この二つを安易に同一視してしまうところに、「人文学」をめぐる議論の混乱の一因があるように思う。⁵

稿者も安酸と同様に、まずは「人文学」と「人文科学」は区別すべきだ、と考える立場をとる。というのも、人文科学ではなく「人文学」の概念の方には、古くから受け継がれてきた「自由」の概念に結節する人間の学問的・教育的営為の重要な概念が移植されていると思えるからである。

こうした考えから今回は、「人文学」という語にこだわり、その現れについて間接的な現れも含めて明治期以降に発行された国語辞典を対象に調査を行ったので、その結果を元に残りの紙面で考察を進めたい。だがその前に、人文学の概念の考究のための今後の方向付けにもなるので、今までの文脈の延長として一つだけ検討しておきたい事柄がある。それは、安酸が指摘している「人文学」と「人文科学」を「安易に同一視してしまう」傾向は、どうして起こるのかについてである。

この点については、「人文学」の概念を、相対概念として、また、類概念として捉えようとしているからだ、というのが稿者の推測である。先に引用した広辞苑（第7版）の「人文科学」の語釈で説明すると、「人文科学」と同義関係を結んだ「人文学」という概念は、「自然科学・社会科学に対して」の文言が示しているように、「自然科学」と「社会科学」の

両概念と相関して初めて存在しうる概念になる。また、「哲学・歴史学・文学など」の「学問の総称」といった語釈の文言は、〈人文科学＝人文学〉の概念が、他の「哲学・歴史学・文学など」の幾つかの学問の概念を外延として包括する類概念であることを示している。このように「人文学」を「人文科学」と同義関係を結ばせる背景、換言すれば、「人文学」と「人文科学」を「同一視してしまう」背景には、「人文学」の概念を相対概念や類概念として捉える見方が大きく影響しているのではないかと、思われる。こうした見方に対して、稿者が違和感を覚えるのは、分類の為の（ある意味機械的な）大枠のカテゴリ一名に過ぎない人文科学とは異なり、「人文学」の概念はそれ自体で独立して意味が定まる絶対概念として捉えるべきだ、と考えるからである。

以上のような人文学の概念に対する基本的なスタンスを保ちつつ、次章では明治から現代までの国語辞典内の「人文学」の言葉の現れを具体的に探っていくことにする。

2. 国語辞典内の「人文学」の言葉の現れ：通時的なアプローチ

まず、国語辞典内の「人文学」の語の現れを調べるといことで、今回、資料として用いたのは、明治期以降発行されている（①は自費出版）主要な41冊の国語辞典である。体系的な調査とは言い難いが、今回は、「人文学」の言葉の現れの傾向が探れればよいと目標設定を低く定めた。

今回調査した国語辞典の一覧⁶

【明治期】

- ①言海（第3冊、1890）発行者：大槻文彦
- ②日本大辞書（第8巻、1893）日本大辞書発行所
- ③日本大辞林（1894）宮内省
- ④日本新辞書（1895）松雲堂
- ⑤帝国大辞典（1896）三省堂
- ⑥日本大辞典（1896）博文館
- ⑦日本新辞林（1897）三省堂
- ⑧ことばの泉（訂正版、1900）大倉書店
- ⑨言海（1904）吉川弘文館
- ⑩辞林（1907）三省堂
- ⑪新選日本大辞典（1910）新興舎
- ⑫大辞典（上巻、1912）嵩山堂

【大正期】

- ⑬大日本国語辞典（1916）富山房
- ⑭言泉（1922）大倉書店

- ⑮広辞林 (1925) 三省堂
- 【昭和期：戦前】
- ⑯大辞林 (1931) 忠誠堂
- ⑰大言海 (1933) 富山房
- ⑱広辞林 (新訂版、1934) 三省堂
- ⑲辞苑 (1935) 博文館
- 【昭和期：戦後】
- ⑳広辞苑 (第1版、1955) 岩波書店
- ㉑広辞苑 (第2版、1969) 岩波書店
- ㉒日本国語大辞典 (第一版、第11巻、1974) 小学館
- ㉓広辞苑 (第2版増補版、1976) 岩波書店
- ㉔広辞苑 (第3版、1983) 岩波書店
- ㉕大辞林 (第1版、1988) 三省堂
- 【平成以降】
- ㉖広辞苑 (第4版、1993) 岩波書店
- ㉗大辞泉 (第1版、1995) 小学館
- ㉘大辞林 (第2版、1995) 三省堂
- ㉙広辞苑 (第5版、1998) 岩波書店
- ㉚大辞泉 (第1版増補、1998) 小学館
- ㉛日本国語大辞典 (第2版、第7巻、2001) 小学館
- ㉜大辞林 (第3版、2006) 三省堂
- ㉝広辞苑 (第6版、2008) 岩波書店
- ㉞大辞泉 (第2版、上巻、2012) 小学館
- ㉟旺文社国語辞典 (第11版、2013) 旺文社
- ㊱広辞苑 (第7版、2018) 岩波書店
- ㊲大辞林 (第4版、2019) 三省堂
- ㊳岩波国語辞典 (第8版、2019) 岩波書店
- ㊴新明解国語辞典 (第8版、2020) 三省堂
- ㊵明鏡国語辞典 (第3版、2021) 大修館書店
- ㊶三省堂国語辞典 (第8版、2022) 三省堂

今回、最初の作業として、一覧全ての国語辞典について「じんぶんがく (人文学)」の項目を中心に調査した。しかし「人文学」の言葉が立項されている国語辞典は一つも見当たらなかった。このことから「人文学」という3字語の漢字の言葉は、明治から令和の現在に至るまで国語辞典においては全く語釈(意味)を有してこなかった、と指摘できる。

このことを確認した後、稿者は「人文学」という語が近代西洋の未知の諸制度・思想・文物を急激に移入した明治期に、「人文」という2字語の漢語が造語要素としての語基⁷となって借用され、原語(洋語)に対応するように造られた翻訳語(複合語)であると仮定した。形態論的には、「人文学」の語は、「人」、「文」、「学」、「人文」、「文学」といった形態素に分解

できるが、今回は、「人文+学」の複合語と仮定して考察を進める。ただし、このことは、人文学を「人+文学」に分解できる複合語として捉える可能性を否定するものではない。人文学を「文学」を語基(造語要素)として捉える見方も稿者には重要であると思われるからである。

以上のような観点で一覧にある国語辞典を「人文」の語に注目して見直した。その際、「人文学」に対応する英語が humanities であるといった通説は一旦保留にし、「人文学」と原語(洋語)との対応関係をより広く捉えられるように意識し、その意識を「人文」の語の調査にも反映させた。

まず、「人文」が漢語であること、それも漢籍に出典のある漢語であることは、先章で引用した広辞苑(第7版)の「人文」の語釈の冒頭が示している。具体的に言えば、見出し語「人文」の直後にブラケットで囲まれた「[易経^{賁卦}「人文を觀て、以て天下を化成す」]」の所である。この部分は、「人文」が『易経』の「賁卦」に現れる漢語「人文」の借用語であることを示している。ちなみに、典拠の『易経』では漢語「人文」は次のような文脈に登場する。

象曰、賁、亨。柔來而文剛、故亨。分剛上而文柔、故小利有攸往。天文也。文明以止、**人文**也。
觀乎天文以察時變、觀乎**人文**以化成天下。
 象曰、山下有火、賁。君子以明庶政、无敢折獄⁸。

たん いは ひ じうきた り とう かぎ ゆゑ とほ
 象に曰く、賁は、柔來りて剛を文る、故に亨る。
 剛を分かち上りて柔を文る、故に小しく往く攸
 有るに利しきなり。剛柔交錯するは、天文なり。
 文明にして以て止まるは、**人文**なり。天文を觀
 ては以て時變を察し、**人文**を觀ては以て天下を
 化成す。

しょう いは やま した ひ あ ひ くんしもつ
 象に曰く、山の下に火有るは、賁なり。君子以
 て庶政を明らかにし、敢て獄を折むる無し⁹。

〔ゴチック・下線稿者〕

さて、国語辞典において、「人文」という言葉が漢語からの借用語であるということは、その漢籍の提示によって判断できる。その明示がある国語辞典を調べたところ、大正では⑬⑭、戦前昭和では⑰⑱、戦後では広辞苑の第1版～第7版全てと日本国語辞典の第1版・第2版で確認された。そして、それらの辞書全てに、引用下線部の漢文の後半部、又は全体が引かれていた。この結果から、「人文」は漢語からの借用語であることが確認できた。また「人文」

に追項される子見出し語や「人文」を含む親見出し語は、その語の形成過程に翻訳行為が介在するかしないかという点は別にして、その殆どが2字語の漢語「人文」が語基（造語要素）になって形成された言葉ではないかと推測できる。

以上の考察を踏まえ、2字語の漢語「人文」が語基（造語要素）になって形成されたと考えられる言葉で、戦後、国語辞典に頻繁に現れている語を4つ抽出した。それは、「人文科」、「人文科学」、「人文主義」、「人文地理学（あるいは人文地理）」である。

明治から令和に至る調査の全体的な時間軸で見た場合、もっとも頻繁に現れているのが「人文主義」であり、その次が稿者にとっては意外であったのだが「人文地理学（人文地理を含む）」、それから「人文科学」、「人文科」と続く。もちろん時代の軸の設定の仕方によってはこの全体像とは異なった個別の状況が現れている。

例えば、戦後の国語辞典22冊に限って言えば、「人文主義」と「人文科学」の現れ状況は全く同じで、⑳～㉑の全ての国語辞典で立項されており、その内、㉒⑳㉓㉔㉕を除く18冊の辞典では「人文」に従属する子見出しとして立項されている。一方、「人文科」と「人文地理学」は、中型大型の国語辞典では「人文科学」と「人文主義」の両語の現れ状況と同じだが、㉖以降の最新版の小型の国語辞典では、「人文科」が㉗㉘㉙㉚㉛で、「人文地理学」が㉜㉝㉞㉟で立項されていない。また、この4つの語のうち、明治から戦前昭和の期間に、国語辞典に現れる機会が全くないのが、「人文科学」と「人文科」である。しかし、国語辞典に頻出している「人文主義」も明治後半になってから初めて国語辞典に登場している。

ところでこの4つの語の現れの調査中に一つの興味深いことを発見した。それは、「人文主義」の最初の現れが、「人文」の最初の現れと同時に起こっているということである。

つまり、「人文」が最初に立項されている場所に「人文主義」という語も初めて追項されているのである。その状況が見出せたのは、㉟辞林（1907 [明40]）である。また、この㉟辞林を境にそれ以前に刊行された国語辞典には、「人文」および「人文主義」などの複合語の現れは一つも見つけられなかった。

では、㉟辞林における「人文」と「人文主義」の語の最初の現れを具体的に見てみたい。

じんぶん【人文】(名)㊦人類の文明。人世の文物。
㊧人物と文物と、「一の淵叢」。一しゆぎ【人文

主義=Humanism】(名)㊨「じんだうしゆぎ」(人道主義)と同じ。㊩出世間の事を外にして世間の事を中心とした主義。

上の語釈を考える上で、自明になっていることを再確認しておきたい。それは、「人文主義」がHumanismの翻訳語であるという点である。ということは、この時点で、少なくとも語基（造語要素）としての「人文」という2字語の漢語が見出されていたということである。ここで「見出されていた」という言葉を使うのは、『辞林』より前の国語辞典では、「人文」の言葉の現れが全く無いからで、つまり、国語辞典の文脈においては見出されていなかったからである。

さらに㉟辞林（1907）における「人文」と「人文主義」の最初の現れに関して、もう一つ興味深い点が存在する。今回の調査では、国語辞典における「人文学」の言葉の現れを調べる作業の他に、翻訳語としての「人文学」の言葉の現れという観点から、英和辞典の調査も同時に進めてきた。その英和辞典群の中には、近代以降の学術用語の確立に決定的な役割を果たした英和对訳形式の『哲学字彙』¹⁰初版（1881）、再版（1884）、三版（1912）も含めている。興味深い点とは、その『哲学字彙』に「人文主義」という語が現れるのは1912年の三版からであり、㉟辞林（1907）における「人文主義」という語の現れの方が『哲学字彙』三版よりも先だ、ということである。

この点が気になり、明治期の哲学関係の辞典を調べてみると、㉟辞林（1907）の「人文主義」の語釈は、日本で最初に刊行された哲学に関する辞典、朝永三十郎著『哲学辞典』（1905[明38]）¹¹における「人文主義」の項目の解釈に依っていそうなことが見えてきた。その解釈を確認するまえに、この哲学辞典の性格について朱京偉は重要な事柄を述べているので引用しておきたい。

『哲学字彙』初版発行の明治14年（1881）から明治35年（1902）までの20年余りの間は、哲学用語の大量創出期にあたりと考えているが、単行本資料の豊富さとは対照的に、哲学辞典類のほうでは、明治38年（1905）朝永三十郎の『哲学辞典』が現れるまで、長い間空白の状態が続いていた。なぜ明治38年以後になると、哲学辞典が続々と出版されたかについて考えれば、それは、その時期に哲学用語の体系がほぼ形成されたという状況の現れだとも考えられよう¹²。

つまり、⑩辞林における「人文」の語釈全体は、Humanism の概念の哲学的な検討の末に、原語 Humanism と訳語「人文主義」の関係が安定し、その後書かれたものだ、と考えることができる。⑩辞林の「人文」の語釈に取り込まれたと推測できる『哲学辞典』内の項目「人文主義」の最後の三行は、原語 Humanism に、「人文」という2字語の漢語を充てるべきかどうかといった逡巡が含まれているようで大変興味深い。

人文主義 (仏 Humanisme. 独 Humanismus. 英 Humanism)

(一) 凡て、宗教的、出世間的の事を外にして、人間的、世間的の事を中心とせる、理想、信仰、又は駆行動等を指さす。

(二) 中世の末期に於ける所謂人文派又は人文学者 (独 Humanisten 英 Humanists) の精神、理想、教説等を特に人文主義と称す。〔中略〕
人文てふ語は、普通、出世間的、宗教的のことも含むを以て、人文主義てふ語は「フマニスム」の譯語としては余り広漠に失する患あらんか。音譯を用ゐる方或は便利ならん。¹³

〔下線稿者〕

上の解釈には、「人文派」および「人文学者」といった「人文学」という語に近接する言葉が登場しているが、ここではその点については踏み込まないことにする。先ほどの⑩辞林内の「人文」の語釈と比較すれば、それが『哲学辞典』(1905)の「人文主義」の解釈に依っていることは明らかであろう。さらに、上の解釈では明らかになっていないが、⑩辞林の「人文主義」の語釈では、「人文主義」と「人道主義」との間に同義関係が成立している(「⊖「じんどうしゆぎ」(人道主義)に同じ)。このことから、humanism の哲学用語として「人文主義」が定着する前に、humanism と「人道主義」との間に〈原語—訳語〉の関係が築かれていたのではないかと推測できる。つまり、ある時点までは「人文」ではなく「人道」という2字語を語基(造語要素)とみなして、Humanism の概念を捉えようとしていた、ということである。

「人道」という2字語も、漢籍の出典がある漢語であり¹⁴、西周の著述に使われていたことは分かっているが、それがのちに「人道主義」という術語の形成につながった可能性がある、と朱京偉は指摘している¹⁵。西周が漢語「人道」を用いた著述箇所は、眞田治子の研究によって6つあることが分かっ

り、次の資料では、その6つの箇所について漢語「人道」と西周哲学用語の原語(ルビ付き訳語)との対応関係および出典・刊行年の項目を立て、それに実際の西周の著述の文章を合わせている¹⁶。

①人道—humanities (『百学連環總論』1870)

〔〔前略〕英語 Humanities[人道] 或は Elegant Literature[高尚ノ文章]. 英國文章をヒマニツチと云ふ意は則ち Mental Civilization[心ノ開花]なる意にして、凡そ文字なるものは心を開くものなれば、文字をヒマニツチ即ち人道と云ふに至れり。心の開くは是道の明かなるなり。心の開くは文字に關係する最も大なりとす。〔後略〕〕¹⁷

②人道—humanities (『百学連環聞書』1870)

言葉遣いに関して若干の違いがあるが、①とほぼ同内容なので略¹⁸。

③人道—anthropology (『百学連環第二編上』1870)

「此性理學の一種に Anthropology[人道]なるあり。」¹⁹

④人道—アントロポロジー (anthropology) (『百学連環第二編上』1870)

「是も亦物理に就て説くものにして、性理及びアントロポロジー人道と相關係して甚た似合たるものなり。」²⁰

⑤人道—モラル (moral) (『生性發蘊』1893)

「此人間學テフハ、其一ヲ、モラルレリジウン人道教門ノ學トシ、其一ヲポリチツク治道經濟ノ學トシ、其一ヲ綱紀法律ノ學ト、スルヲ明カナリ、」²¹

⑥人道—ヒユマニツチ (humanity) (『生性發蘊』1893)

「是即チ預メ、ネチユールオフメン人性ノ學ヲ講シテ、以テヒユマニツチ人道ノ學ニ入ルナリ」²²

〔ゴチック・下線稿者〕

ちなみに眞田治子(2002)に拠ると、西周の公刊・未公刊著作において、原語およびルビ付き訳語の中で漢語「人文」と関係を結んでいる事例は一つも見られない。つまり、西周は「人文」という漢語を著述においては使用していない、ということである。

以上のことから、語基（造語要素）としての漢語「人道」が、原語 *humanity*、*humanities* の概念の哲学的検討の過程で結びつき、後に *humanism* に対応する「人道」を語基とした複合語（人道主義）が形成された、と考えることができる。また、その過程において、別な漢語の語基の必要性に迫られ、「人文」という漢語の語基が見出され、「人道主義」から「人文主義」という術語に置き換わっていったのではないか、と思われる。どうして *Humanism* に対する翻訳語として、その基盤になる漢語が「人道」から「人文」に変化して行ったのか、という点については、現時点では明確なことは言えない。ただあくまでも推論としてではあるが、『哲学字彙』三版では「人文」という漢語が英語 *Culture* と〈訳語—原語〉の関係を結んでいる²³ことから、*Humanism* の概念の検討の際に、西周の築いた〈人道—*Moral, Anthropology, Humanity, Humanities*〉という語彙の連関から、〈人文—*Culture, Humanity, Humanities*〉の連関へと見直されていったのではないか、ということが言えるように思える。また、西周が「百學連環総論」において述べている「文と道とは元トーツなるものにして、文學開クときは道亦明かなるなり。」²⁴という漢語の語源的な観点も、重要な鍵になるのではないと思われる。

おわりに

以上、本稿では、人文学の概念の考究のための第一歩として、国語辞典における「人文学」の語の現れを考察し、その後、語基としての漢語「人文」の検討に繋げていった。ここで今回の考察でのまとめを述べるならば、「人文学」という語は、ラテン語の *humanus* を語源とする一連の言葉、英語ならば *humanity*、*humanities*、*humanism* といった概念の日本における哲学的な検討過程および翻訳語の形成過程において、2字語の語基（造語要素）としての二つの漢語（「人道」と「人文」）からの何らかの影響を受けながら生成された語ではないか、ということである。次稿では、この手掛かりを意識し今回の考察を踏まえながら、国語辞典内の現れとは異なる様相を見せる英和辞典における「人文学」の語の現れについて考察していきたい。

¹ 児玉善仁他編（2018）『大学事典』（平凡社）、pp.532-533では、「人文学」という語が立項されている。

² 広辞苑（第1版）には英語が付されていない。第2版、

第2版増補版、第3版、第4版には、第5版と同様に、「人文学」に *human sciences* の原語が付されている。

³ 「凡例」、広辞苑（第7版）、p.17。

⁴ 安酸敏真（2015）「現在、あらためて『人文学』を問う」、*WASEDA RILAS JOURNAL* 3、早稲田大学総合人文学センター、pp.245-253。

⁵ 同上、p.247。

⁶ 調査に用いた国語辞典に関して、①～⑩、⑬、⑭については、国立国会図書館デジタルコレクション (<https://www.dl.ndl.go.jp/>) を利用した。

⁷ 術語「語基（造語要素）」とその生成法・造語法については、高野繁男（2004）『『哲学字彙』の和製漢語：その語基の生成法・造語法』（『人文学研究所報』37、神奈川大学、p.87-108）を参考。

⁸ 今井宇三郎（1987）『易経（上）』新釈漢文大系23、明治書院、p.469。

⁹ 同上、p.469。

¹⁰ 『哲学字彙』に関しては、『哲学字彙』（東京大学三学部印行、1881）を初版、『改定増補 哲学字彙』（東洋館書店、1884）を二版、『英仏独和 哲学字彙』（丸善、1912）を三版とそれぞれ表記する。この三冊の『哲学字彙』については、名著普及会の復刻版（1980）を利用した。

¹¹ 朝永三十郎（1905）『哲学辞典』（宝文館）。

¹² 朱京偉（2002）「明治期における近代哲学用語の成立：哲学辞典類による検証」『日本語科学』12、国立国語研究所、pp.96-127。引用は p.99 より。

¹³ 前掲11、p.198。

¹⁴ 諸橋轍次（1984）『大漢和辞典 修訂版』（大修館書店）の「人道」の語釈には、「⊖人のふみ行ふべき道。人倫」の意味領域に、『礼記』、『中庸』など漢籍における出典が記されている。

¹⁵ 前掲12、p.109。

¹⁶ ここでは眞田治子（2002）『近代日本語における学術用語の成立と定着』（絢文社）に基づき（p.217、p.223、p.248、p.252、p.268）、西周が著作において「人道」という語を使用している箇所を6つ特定し、その部分の文章を『西周全集』から抜き出し①～⑥で対応させている。

¹⁷ 大久保利謙編（1981）『西周全集IV』宗高書房、pp.18-19。

¹⁸ 同上、p.49。

¹⁹ 同上、p.149。

²⁰ 同上、p.149。

²¹ 大久保利謙編（1966）『西周全集I』宗高書房、p.6。

²² 同上、p.110。

²³ 井上哲次郎他共著、飛田良文解説（1980）『英仏独和 哲学字彙（三版）』（名著普及会）、p.33。

²⁴ 前掲17、p.17。